

## 平和を愛する烏雲先生の訃報に接して

徳島県日中友好協会は、戦後 80 周年として、「平和友好訪中団」を編成し、大連・丹東・通遼・瀋陽の四都市を訪問した。10 月 29 日には、烏雲先生との再会のために通遼を訪問した。通遼では、庫倫旗第一中学で日本語の教鞭をとられていた王玉珍先生と現在も日本語教師として活躍されている包金鳳先生が出迎えてくれた。早速、烏雲先生の近況を尋ねると「現在、闘病中で面会できない状態」であると報告を受けた。馬英春(長男)さんご夫婦が付きっきりの看病にあたっているとのことで、馬森(孫)さんが私たちに会いに来てくれた。徳島県知事からの感謝状(徳島県と中国との架け橋として沙漠植林活動等に尽力した功績)と徳島県の民芸品(遊山箱)を馬森さんから烏雲先生に届けていただくよう依頼した。感謝状と記念品は、烏雲先生の植林活動にちなみ全て木製品で造られており、徳島県知事をはじめ県関係者のご配慮に感謝している。

「平和友好訪中団」が帰国して一週間後の 11 月 7 日、烏雲先生が亡くなられたとの訃報に接し、何とも言えない悲しみに包まれた。「平和友好訪中団」が通遼を訪問していた時は、「がんの転移により体力的にかなり厳しく苦しい状態だった」と推察される。いつも笑顔の烏雲先生が目に見え、やさしく声をかけてくれる姿が思い出される。10 日には、烏雲先生の遺言で大連沖の黄海にご主人の遺灰と共に散骨された。二つの祖国を持つ烏雲先生は、いつも「平和が一番大切です」と話していたが、これからは「一衣帯水」の海を自由に行き来できることで、文字通り友好交流の大切さを私たちに示してくれている。烏雲先生の今日までのご功績を偲び、安らかならんことをお祈りし、衷心より哀悼の誠を捧げたい。

烏雲先生と私は、1997 年、連合徳島と友好労組関係にある丹東市総工会の劉励威主席から「人民日報」に紹介されている烏雲先生の記事をいただいた。劉主席は、「烏雲先生は、徳島県出身の残留孤児であり、いま政治協商会議全国委員として沙漠植林活動と内モンゴルの教育活動に力を注いでおり大変立派な女史である」と紹介を受けたのが始まりである。

烏雲先生は、「庫倫旗第一中学の子どもたちに日本語を学ばせたい」との強い思いを持っていた。内モンゴル自治区の日本語センターはフフホトに開設されており、東の日本語センターを「庫倫旗第一中学」に開設する提案を行ったところ「交流拠点」としての設備が不十分であるとのことであった。私たちは、烏雲先生の思いを実現するため「烏雲の学校を設立する徳島県民の会」を立ち上げ、募金目標 400 万円を設定し募金活動をはじめた。1999 年 9 月 2 日、日本語教室開設落成式が開かれ、徳島からも 25 人が参加した。前夜祭には、地域住民 1 万人が集まり「かがり火」を囲んだアトラクション等が行われた。日本語教室が入る校舎は、4 階建ての立派なコンクリート造りで庫倫旗政府の出資と県民の会の募金によって建設された。「烏雲の学校を設立する県民の会」は、「支援する」と名称を改め、日本語教育を支援するため、日本語指導員を年次的に 7 人派遣し、同時に庫倫旗第一中学からは 1999 年から 2005 年まで 6 人の教師を 1 年間日本語学習のため招待し、徳島県教育委員会や県内小中学校に派遣した。さらにこの活動は、建設募金活動から就学援助活

動である「烏雲奨学基金設立」へと活動が広がり、徳島県日中友好協会会員をはじめ徳島県民からの募金を集め、烏雲先生を通じて日本語を学ぶ子ども達への教育支援として活用された。また、徳島県労働者福祉協議会は、2011年から日本語を学ぶ生徒の中から2人を日本に招待する事業を始め、徳島市北井上中学校や城南高校、徳島文理高校、四国大学留学生等との交流が行われた。日本文化に触れる旅として東京をはじめ奈良や京都を訪問した。この交流は、コロナ禍が始まるまで続けられた。2013年には、北井上中学校の生徒2人、歴代校長4人が庫倫旗第一中学を訪問し、文字通り日中相互交流が実現できたことは特筆される成果である。

2019年9月、烏雲先生が(公財)残留孤児援護基金の里帰り事業で4年ぶりに国府町の実家である「立花家」に里帰りしたことに合わせ「おかえりなさい烏雲先生里帰り交流集会」が開かれ、盛大な交流会となった。この交流集会の中で今日までそれぞれで活動していた団体をついにまとめる提案があった。2020年1月、烏雲先生関連団体が集まり、「烏雲先生の功績をたたえる会」を結成し、約一年間の討議を経て、2021年1月26日(火)「烏雲先生をたたえる市民の会」設立総会を開催した。加盟団体は、「烏雲の学校を支援する徳島県民の会」「烏雲の森沙漠植林ボランティア協会」「内蒙古愛陽協会」「徳島県労働者福祉協議会」「徳島県勤労者福祉ネットワーク」「徳島県日中友好協会」の6団体で組織し、「①小学校高学年、中学生用の小冊子を作成し、県下全ての小中学校に贈呈する。②烏雲先生を徳島市名誉市民並びに徳島県民表彰へ推薦する。③烏雲先生の功績をたたえる記念イベントを開催する。」③の記念イベントは、里帰り記念集会、徳島市と内モンゴル通遼市における交流集会とした。また、2022年11月から2023年2月にかけて読書感想文コンクールを実施、県下の小中学生からの作文募集を行い、小学6年生から25人、中学2年生から18人の応募があった。地元の北井上小学校6年生、北井上中学校では授業の中で取り上げられ新聞でも大きく報道された。2023年9月に里帰りの予定で準備を進めたが、体調不良のため里帰りによる来徳を急遽中止した。そんなこともあり、2024年9月には、万難を排しての里帰り事業の受け入れ、念願であった甫さんの墓参のために里帰りした。地元北井上中学校文化祭に招待され、全校生徒に対して「平和が一番大切」と話した。「おかえりなさい烏雲先生里帰り交流会」を開催し、庫倫旗一中の王玉珍先生、包金鳳先生を招待した盛大な交流会になった。特に、北井上中学校からも6人の生徒が参加し、文化祭に出席してくれたお礼と感想メッセージを烏雲先生に伝えた。

2025年1月、烏雲先生から今年の帰国は「高齢で体力的に自信がない」と連絡があった。昨年の里帰りに際して、猛暑の中で本当に体力の限界に近い状態で交流を続けてくれたことに感謝している。何事にも代えがたい多くのメッセージを私たちに残してくれた烏雲先生、「平和を愛する偉人」として後世の人々に伝えなければならないと思う。

合 掌

2025年12月1日

藤原 学（徳島県日本中国友好協会 副会長）